教員相互による公開授業参観の成果と課題
―授業担当者及び参観者による報告書のテキストマイニング分析を通して―

鍛 治 谷　静　　北 村　瑞 穂　　金 津　春 江　　榊 原　和 子
四條畷学園短期大学

Issues on the Peer Review of Teaching for Faculty Development–Based on Analyzing Participant's Comments by Text Mining

Shizuka Kajiya, Mizuho Kitamura, Harue Kanatsu, Kazuko Sakakibara
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要　第 49 号　別刷
平成 28 年 5 月 31 日

原著

教員相互による公開授業参観の成果と課題
－授業担当者及び参観者による報告書のテキストマイニング分析を通して－

鍛治谷 静 *　北村 瑞穂 **　金津 春江 ***　榊原 和子 ***

Issues on the Peer Review of Teaching for Faculty Development–Based on Analyzing Participant's Comments by Text Mining

Shizuka Kajiya, Mizuho Kitamura, Harue Kanatsu, Kazuko Sakakibara

四條畷学園短期大学がFD活動の一環として実施した「教員相互による公開授業参観」（2010年度後期～2014年度後期：合計9回実施）について、授業を公開した教員と参観した教員が作成した報告書247枚をテキストマイニングにより分析した結果、その成果と課題は以下の通りであった。報告書には授業担当者・参観者間の対話があり、授業改善に向けての協働が見られたことが成果といえる。一方、授業改善を実現するための具体的な方法や工夫、戦略等をどうすれば得られるかということと、公開授業参観によってそれぞれの授業がどの程度、どのように改善したかを評価するシステムの構築が課題とされた。その評価システム構築のためには「授業改善」の具体的内容についての議論の必要性も示された。

Key words:　FD、教員相互、公開授業参観、テキストマイニング

Ⅰ　問題と目的

1990年代初め、大学審議会答申で「ファカルティ・ディベロップメント」（以下FDと略す）が取り上げられて以来、高等教育機関の教育改革は文部科学省施策により推し進められてきた。特に2008年の大学学部におけるFD義務化以降、FDは「やらければならないもの」として急速に浸透し、展開されてきた。高等教育機関におけるFD活動に関する先行研究をレビューした張ら（2015）は、こうした経緯の中で先進的な取り組みや優れた実践が見られる一方で、制度としてのFDは広まったが「FDの組織化における停滞、FD活動内容の固定化及びFD活動と大学教員のニーズとの乖離等」を課題に上げ、それぞれの現場に即したFDの実質化の難しさを示唆している。

四條畷学園短期大学（以下、本学と称す）のFD活動は、その義務化に先駆けて2005年の「授業評価アンケート」に始まる。翌2006年からは「教員相互による公開授業参観」を併せて実施し、これらを二本柱に授業の改善および教授法の向上に努めてきた。さらに2010年には、学内FD委員会で検討を重ね、授業評価アンケート項目の見直しや授業参観で教員が作成する報告書の書式改訂等を行った（北村他，2013）。

「教員相互による公開授業参観」はその名の通り、高等教育や教授法の専門家または管理職が授業の評価や指導を行うことが目的ではなく、同僚である教員集団との対話を通し互いの授業改善の契機を得ることをねらいとするものである。

小原ら（2013）は、自らの授業を公開することには次の意義があると述べている。第一には指導方法や教材開発などの教授スキルを向上させる手掛かりを得ること、第二に教員間の交流を促進し、望ましい授業についての価値観を伝え合う機会を得ること、第三に講習会型FDよりも緊張感を伴った参画意識が得られること、の3点である。また、教員が他の教員の授業を参観することは、「他の教員の授業は鏡的役割を果たす」ため、「自らの授業についてのリフレクションを相対化する意味も持つ」とされる（石村，2002）。

つまり、公開授業参観は授業担当者・参観者ど

＊　四條畷学園短期大学　保育学科
＊＊四條畷学園短期大学　ライフデザイン総合学科
＊＊＊四條畷学園短期大学　ライフデザイン総合学科「総合福祉コース」

ちらにもメリットがあるといえるが、本学における状況を鑑みると回数を重ねるごとに次第にルーティーン化してきているのは否めない。本学においても張らの指摘した課題が浮上してきているといえる。

本論の目的は、本学のFD活動のうち「教員相互による公開授業参観」について、2010年以降4年半にわたる成果と課題を、授業を公開した教員と参観した教員が作成した報告書に基づき明らかにすることである。FD活動のさらなる実質化に向けての議論の端緒としたい。

Ⅱ　方法とデータ

Ⅱ－1　テキストマイニングについて

今回分析の対象とする報告書は、字数の制限もない自由記述の形式をとっている。ここから公開授業参観の成果や課題につながる記述の特徴や傾向を見出すには、テキストに含まれる一つ一つの文章を網羅的に俯瞰しなければならないが、それは労力的にも技術的にも困難を伴う。手作業で得られたその結果も分析者の目にたまたま留まった文章から抽出されたとの印象を持たれやすい。そこで、コンピューターの情報処理能力を借りてまず量的な分析を行い、次いでデータの質的側面に接近を試みることができるテキストマイニングの手法を採用した。

マイニングminingとは「採掘する」という意味で、テキストマイニングとは大量かつノイズを含むデータを対象に情報科学やデータ科学に基づいて分析を行い、有用な情報を掘り出すことをいう（石田他，2013）。また、本研究で用いたソフトウェアKH Coderの開発者である樋口（2014）は、「人間の独創性を活かしつつ、どのようにして客観性ないしは信頼性を維持するのかというバランスの取り方が大きな問題となる」と述べ、テキストデータを客観的な数値データで示すことができる計量的手法の利用を文章型すなわちテキスト型のデータを分析する時の客観性ないし信頼性を担保しうる方法としてサジェスチョンしている。

Ⅱ－2　「教員相互による公開授業参観」および「公開授業に関わる報告書」について

今回の検討対象となる「教員相互による公開授業参観」は、2010年後期から2014年後期にわたって前期後期に各1回ずつ、合計9回にわたり以下の方法で実施された。

専任教員は、指定された約1か月の期間中に少なくとも1つ以上の授業を公開し、公開される授業一覧からも1つ以上の授業を選び、参観しなければならない。非常勤教員の参加は任意で、参観のみ、公開のみでも可とされた。授業担当者は、FD委員会を通じて公開授業の事前に参観者の有無を知らされていた。

なお、本学は保育学科・ライフデザイン総合学科・ライフデザイン総合学科「総合福祉コース」（2012年度に介護福祉学科を改組）の2学科・1コースを擁すが、参観は教員の所属に関わらず、どの学科・コースの開講授業を選んでもかまわない。

分析の対象とする「公開授業に関わる報告書（資料1）」（以下報告書と略す）は、授業担当者・参観者双方にその作成とFD委員会への提出が義務づけられたものである。報告書の仕様は、以下の通りである。

報告書（A4用紙）は①～③の自由記述欄からなっている。①欄は授業担当者が「授業に関しての方針、困りごと・改善したいこと等」（以下＜担当者コメント／前＞と略す）を事前に記入し、FD委員会を通じて参観希望者に手渡される。つまり、参観者は参観前に授業担当者の授業に関する方針や困りごと等を知った上で参観に臨むことになる。②欄は授業参観後に参観者が「＜担当者コメント／前＞に対する意見および助言、自身の授業にも取り入れたいと思った教授方法や授業実施上の工夫等」（以下＜参観者コメント＞と略す）を書く欄である。

①および②欄が埋まった報告書は、再度FD委員会を通じて授業担当者に返却される。授業担当者は、残る③欄に「授業を公開しての感想および＜参観者コメント＞に対する意見等」（以下＜担当者コメント／後＞と略す）を記述し、FD委員会に提出する。報告書は本学のウェブサイト上で公開されるきまりになっており、参観者は報告書が公開された時点で自身のコメントが授業担当者にどのように受けとめられたか知ることができる。

以上のように、この報告書は授業担当者と参観者の授業をめぐる「対話」の形をとっている。この報告書内においてどのような「対話」がなされたのか、テキストマイニングの手法を用いて可視化を試みる。

Ⅲ－３　データ

2010 年後期から 2014 年後期にわたって提出された報告書 247 枚を分析の対象とする。同授業に参観者が複数いた場合、参観者 1 名ごとに報告書が 1 枚作成された。

それぞれの期における専任教員数、報告書枚数、公開授業数および非常勤教員の参加数を**表 1** に示す。どの期においても公開されたが参観者なしの授業があり、逆に一つの授業に複数の参観者が集まる授業があった。このことは、通常の時間割通りに実施されている授業を参観することになるので、公開された授業を参観したくても自分の授業や他の校務と重なっていたら参観できないという物理的な制約も影響していたようである。

表 1　期別専任教員数・報告書枚数・公開授業数

期	専任教員数	報告書枚数	公開授業数
2010 年・後期	23	32（ 7）	40（ 7）
2011 年・前期	23	31（ 8）	34（ 1）
2011 年・後期	23	30（ 5）	32（ 2）
2012 年・前期	22	36（ 8）	39（13）
2012 年・後期	22	26（ 5）	31（ 5）
2013 年・前期	21	25（ 5）	26（ 4）
2013 年・後期	21	23（ 2）	26（ 3）
2014 年・前期	19	22（ 4）	27（ 8）
2014 年・後期	19	22（ 3）	21（ 0）

※（　）内は全数のうち非常勤教員によるもの

表 2 は、学科・コース別報告書枚数を示したものである。なお、ここでいう学科･コースの別とは、教員の所属ではなく参観者のあった授業の「開講学科・コース」を示している。保育学科が半数近くを占めているので、分析の結果には保育学科の授業の特徴が反映されやすいことに注意を要する。また､表中の「総合福祉コース」として示した数は､2011 年後期までの介護福祉学科における報告書数と 2012 年前期以後の「総合福祉コース」の報告書数を合算した数である。以降の分析も介護福祉学科､「総合福祉コース」を「総合福祉コース」として一括して行った。

表 2　学科・コース別報告書枚数

保育学科	ライフデザイン総合学科	「総合福祉コース」
121	73	53
(49.0)	(29.6)	(21.5)

※（　）内は全体に占める割合%

ほとんどが手書き文である報告書の記述内容を＜担当者コメント／前＞＜参観者コメント＞＜担当者コメント／後＞（Ⅱ－２参照）をそれぞれエクセルファイルに手入力し、その後入力者と異なる者が誤字脱字等を点検、修正したデータを分析した。

KH Coder を用いて、分析の前処理を行った結果を**表 3** に示す。複数の参観者があった公開授業は、報告書数は参観者数と同じ数作成されたが、＜担当者コメント／前＞はすべて同じ記述となるため、ケース数は 1 とカウントされた。報告書枚数と＜担当者コメント／前＞のケース数が異なるのはそのためである。記述件数とは、句点“。”で区切られる文章を 1 件と数えたものである。＜参観者＞の記述件数が多いのは、「＜担当者コメント／前＞に対する意見および助言」と「自身の授業にも取り入れたいと思った教授方法や授業実施上の工夫等」を 2 欄に分けて記入を求めたためと思われる。しかし、どちらか 1 欄のみの記入であったり、記述内容が重複していたりするケースが散見されたため、今回の分析では“参観者のコメント”として一括して分析することにした。分析対象語数とは、KH Coder が分析の対象として認識している語の数を示している。分析対象ファイルに含まれている種類の異なる語の総数から、助詞や助動詞のようにどのような文章にもあらわれる語を除外した数である。

表 3　各欄のケース数・記述件数および分析対象語数

	＜担当者／前＞	＜ 参観者 ＞	＜担当者／後＞
ケース数	152	247	247
記述件数	651	1,653	1,155
分析対象語数	1,327	2,736	1,861

Ⅲ　結果と考察

Ⅲ－１　三者における頻出語および特徴的な語

＜担当者コメント／前＞＜参観者コメント＞＜担当者コメント／後＞三者における頻出語の上位 50 語のリストを、それぞれ**表４－１、４－２、４－３**に示す。（※**表４－３**のみ出現回数同数のため、51 語掲載する）

表４－１　＜担当者コメント／前＞における頻出 50 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学生	173	行う	22	現場	13
授業	123	必要	22	作成	13
理解	58	受講	21	使う	13
思う	48	課題	21	集中	13
考える	36	学ぶ	20	目指す	13
説明	31	英語	19	グループ	12
指導	30	興味	19	教育	12
実習	29	講義	19	施設	12
保育	28	困る	18	持つ	12
演習	26	社会	17	自分	12
苦慮	25	基本	15	状況	12
多い	24	知識	14	身	12
内容	24	改善	14	身近	12
時間	23	表現	14	進める	12
難しい	23	方法	14	体験	12
工夫	22	科目	13	伝える	12
介護	22	関心	13		

表４－２　＜参観者コメント＞における頻出 50 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学生	738	分かる	61	効果	43
授業	517	自身	59	聞く	43
思う	385	時間	58	私語	42
先生	178	考える	54	必要	41
感じる	163	取り組む	52	課題	38
説明	126	声	51	使う	38
理解	122	パワーポイント	50	保育	38
集中	91	板書	50	参観	37
内容	90	学ぶ	49	難しい	36
参考	85	取り入れる	48	言葉	35
指導	72	多い	48	問題	35
工夫	69	質問	45	様子	34
大変	68	受講	45	参加	33
見る	65	演習	44	自分	33
良い	65	興味	44	具体	32
方法	64	実習	44	持つ	32
講義	63	プリント	43		

表４－３　＜担当者コメント／後＞における頻出 50 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	290	時間	38	取り組む	22
学生	286	必要	38	伝える	22
思う	231	助言	35	自身	21
考える	79	指摘	34	自分	21
参観	77	良い	33	大変	21
先生	73	今回	31	分かる	21
今後	62	課題	30	保育	21
工夫	60	集中	30	意識	20
理解	56	実習	28	学ぶ	19
内容	49	貴重	28	経験	19
意見	48	反省	27	現場	19
多い	46	方法	27	進める	19
指導	43	改善	25	聞く	19
説明	42	見る	25	教材	18
コメント	39	言葉	25	参加	18
感じる	39	持つ	25	受講	18
頂く	39	少し	23	声	18※

＜担当者コメント／前＞＜参観者コメント＞＜担当者コメント／後＞三者に共通して頻出しているのは「学生」「授業」「思う」「理解」等であることは上記**表４－１～３**から視認できるが、例えば＜担当者コメント／前＞には頻出するが他の二者にはあまり出現しないというような、特徴的に現れる語は一見して分かりにくい。それぞれに特徴的な語は KH Coder の共起ネットワークコマンドを使うと探索が容易になる。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークのことである。共起の程度が強いほど線が太くなり、出現頻度が高い語の円が大きくなる。その結果を以下**図１**に示す。

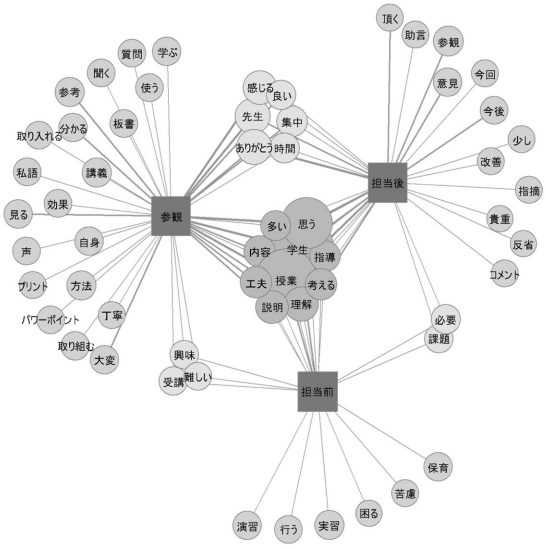

図１　三者の共起ネットワーク

＜担当者コメント／前＞には「困る」「苦慮」「難しい」等といった語が特徴的である。＜参観者コメント＞は「大変」「参考」「分かる」「取り入れる」のほかに「プリント」「パワーポイント」「方法」「声」「私語」等の語が見られ、「興味」「受講」「難しい」が＜担当者コメント／前＞と共通する。＜担当者コメント／後＞は、「今後」「意見」「指摘」「頂く」「反省」「改善」等が特徴的で、＜参観者コメント＞と「ありがとう」「良い」「時間」「集中」等が共通している。また、＜担当者コメント／前＞と＜担当者コメント／後＞どちらにも「必要」「課題」が共起している。

つまり、授業を公開するに当たって授業担当者は授業での困りごとや苦慮していることについて述べ、参観者は授業の方法（板書、パワーポイント、質問、プリント）や授業の様子（私語、声、効果、

丁寧）を取り上げ、自分自身が取り入れたい点、参考にしたい点についてコメント。公開後の授業担当者は感謝の言葉を述べつつ、受けた指摘や助言に反省や改善点を見い出し、今後の課題としたという対話の流れがおおまかに見て取れる。

授業担当者の悩み、参観者の助言および取り入れたいと思ったこと、公開後の授業担当者が課題としたこと、それぞれの具体的内容はどのようなものだったのかを次項以降で見ていく。

Ⅲ－２－１　＜担当者コメント／前＞の記述内容

＜担当者コメント／前＞の共起ネットワークを以下**図２**に示す。使用頻度の高い語ほど大きな円で表され、出現パターンの似通った語が線で結ばれている。後述の**図３**、**図４**も同様である。

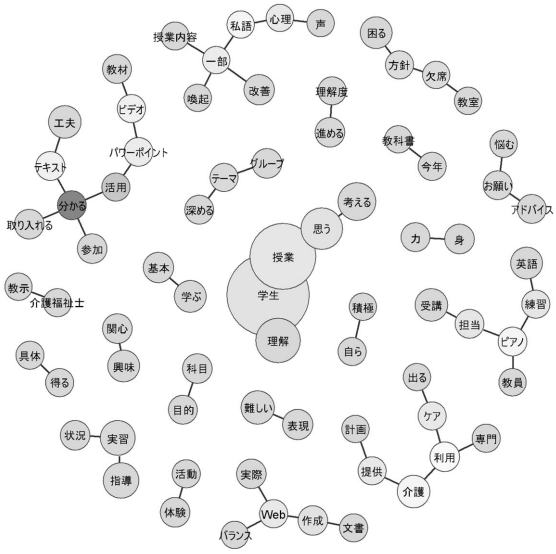

図２　＜担当者コメント / 前＞の共起ネットワーク

KH Coder には KWIC コンコーダンスというコマンドがあり、抽出語がどのような文脈で用いられていたのか検索することができる。このコマンドを使い、「授業担当者の悩み」が語られていると思われる記述として「苦慮」「難しい」「課題」「困る」「改善」「悩む」「苦心」「模索」を抽出し、KWIC コンコーダンスから検索された記述文のうち主要なものを以下に挙げる。（　）は出現回数を示す。

「苦慮」（25）

・学生に自分（人間）の身体について関心や興味をもってもらいたいと思っていますが、その点に苦慮しています。

・実習の事前指導において、未知の世界である施設実習内容をいかに理解させるか毎年苦慮している。

「難しい」（23）

・箱庭のエッセンスを学生に届くことばで表現しきれていない、と難しさを感じています。学生の反応を客観的にご覧いただき、ご助言いただければと思います。

・演習レシピのプリントとデモンストレーションに従って、基本に忠実にまずはやってみるという姿勢で、演習に取り組むよう指導していますが、なかなか徹底が難しいと感じます。また自ら積極的に学んで欲しいと思っています。

「課題」（21）

・学生からは、「何をどう考えたらいいのかわかりにくい」とよく指摘されます。学生が、これまでの学習を踏まえて問題に取り組むことができるような「発問」が課題です。

・企業の概念や、用語の理解が難しいと訴える学生にどのように伝えればよいのかが課題である。

「困る」（18）

・テーマが決まればそれぞれの経験を出し合い、協力してレポートにまとめ、最終的に発表します。困っていることは、実際体験したことを話し合うことはできるのですが、それを深めて考えるということができません。

・困っていることは、遅刻者、欠席者への指導。欠席者が次回まで自学自習（パソコン教室に来て）しないこと。

「改善」（14）

・心理エリアの授業の中でも理解しやすく学生に興味をもってもらえる内容を目指してきた。しかし、一部の学生に居眠り、私語がある。授業改善へのアドバイスを頂きたい。

・授業内容について、テキストを用いての授業ですが、パワーポイントの有効的な利用の仕方が不十分で、ビデオ等の視聴覚教材と併用しての授業の工夫など、改善する余地が多々残されていると思います。

「悩む」（6）

・学生の理解度に差があり、どのレベルに合わせて授業を進めればいいのか悩むところです。アドバイスをお願いします。

・グループ活動は熱心な学生とそうでない学生に分かれてしまう傾向があり取り組みに差が出てしまいます。それをどのようにフォローしたらよいのか悩んでいます。

「苦心」（4）

・授業時間外のピアノの練習時間が足りず (忙しく時間が取れない、気持ちが向かないなど) 先生方は学生のピアノに対するモチベーションを上げるのに苦心しています。

「模索」（4）

・今回は受講者が多く、受講態度の悪い学生も多いため、学生に集中して説明を聞いてもらい、スムーズに授業を進めるための良い工夫について模索しています。

これらを見ると、授業を公開する側からは「学生」の「理解度」に応じた「授業内容」や「授業

展開」の方法について、また学生の「理解」を促し深めるにはどのようにすれば良いか、「興味」「関心」を喚起するには等、現在困っていることを科目の特性や受講学生の実態と合わせてかなり具体的に述べており、改善につながる助言・アドバイスも具体的かつ個別的に求めていることが分かった。図２からも、「Web– 作成 – 文書」や「介護 – 提供 – 計画」などが共起されており、それぞれの学科・コースに特有の課題への言及がなされていたことが分かる。

Ⅲ－２－２　＜参観者コメント＞の記述内容

＜参観者コメント＞の共起ネットワークを以下**図３**に示す。

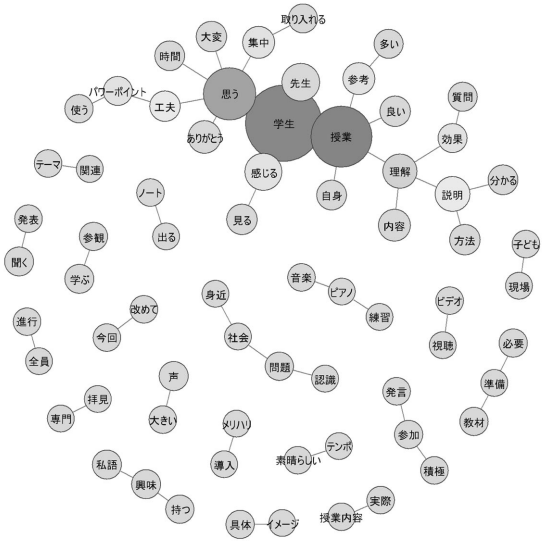

図３　＜参観者コメント＞共起ネットワーク

Ⅲ－２－１で見てきた「悩み」に対する「アドバイス」を「お願い」する授業担当者に参観者はどう答えているのだろうか。前述したように＜参観者コメント＞に特徴的な語は「板書」「パワーポイント」「質問」「プリント」といった授業の方法に関する語、および「私語」「声」「効果」「丁寧」など授業の様子を表す語であった。前節と同様にKWIC コンコーダンスで検索した結果の一部を以下に示す。

①授業方法に関する語

「板書」（50）

・大きな字で板書され、後部座席の学生にも見やすく工夫されていた。

・学生への解説をすぐに板書し、全体にいきわたらせる工夫は私の授業でも取り入れたいと思いました。

・一字一句板書を写させるというような方法ではなくレジメと板書を活用しながらの先生のお話を自由に記述させるという方法は、まさに大学の講義ですが、かえって集中している学生の姿が印象的でした。

・学生の発言を上手く板書したり、発言できない学生にヒントを与えたりと工夫している場面が多く学生も時間とともに授業に積極的に参加していると感じました。

「パワーポイント」（50）

・スクリーンに教科書やパワーポイントを映し、サイドのホワイトボードでポイントを記述するプレゼンは新鮮でした。パワーポイントのアニメーションやムービーも有効に利用されており、食物の入っていくルートが視覚的によく理解できました。

・パワーポイントは見た目の美しさ、時間の短縮に役立つと思いますが、スピードを調整しないと内容によってはついていけない学生もいるように思います。

・パワーポイントに、スライド上で手書き (マウスを使うことになりますが) 加筆できる機能があります。これを利用されたら、スクリーンの上げ下げの面倒が減るかもしれません。

「質問」（45）

・教員が一方的に講義するのではなく、学生に質問をし会話をしながら話を進める方法は効果を上げていると感じられます。

・学生に質問し、理解度を確認するなど、取り入れたいテクニックががたくさんありました。

「プリント」（43）

・口腔ケアは非常に重要な項目で、別に要点をまとめたプリントはとても良いと思います。

・大教室なので、スクリーンとモニター併用になり、通常の板書もあるため煩雑になる恐れもありますが、プリント等でどこを説明しているかわからない学生がいる場合などは、教材提示装置（OHC）の活用も一手かもしれません。

②授業の様子に関する語

「私語」（56）

・静かにならざるを得ない課題を与えることにより私語が減るのだと感じました。また、ありきたりにならない新しい課題、技術の伝授こそ学生が授業に興味を持つ大切なことだと感じました。

・保育者を目指す学生たちにとってイメージしやすい具体的な内容でもあり、学生は私語もなくリラックスしながらも積極的に授業に参加している様子がみられました。

・私語する学生には授業内容を充実させて興味を引くしかないのが現状で、日々苦慮しています。

「声」（51）

・説明の速さや声の大きさもとても聞き取りやすく学生への配慮がうかがえました。

・自分の講義のとき必要以上のボリュームで声高に話していたので、学生に伝わらないことがありました。声の緩急、強弱、高低など参考にさせていただきたいと思います。
・学生が騒がしい時も、穏やかな口調で話され、自然と学生も静まっていくのが印象的でした。私は負けないように声を大きくしてしまうのですが、逆効果になっているのが分かりました。

「効果」(43)

・書籍の紹介を通じて学生の関心を引き出すのは興味をもちやすく、学習意欲の向上にも効果があると思いました。
・学ぶ内容を学生ひとりひとりに指名して解答させる、説明させるという展開は理解を徹底させる手法として効果が高いと思います。

「丁寧」(30)

・ピアノは3名の先生方のレッスンを参観させて頂いた。一人ひとりのレベルに応じて、とても丁寧に、親身になってレッスンして下さっているのが印象的であった。
・学生の理解の様子、状況を良く見ながら、わかりやすくかつ丁寧に授業を進められていて、そして学生からの反応には即応されていてメリハリとテンポの良い授業展開がとても素晴らしいと思いました。

本論の冒頭で述べたように、この教員相互による公開授業参観における参観者は、高等教育や教授法の専門家ではなく自身も日々の授業実践に悩み改善方法を模索している同僚教員である。**図3**にも、「参観－学ぶ」「今回－改めて」が共起されているように、参観した授業で用いられていた方法や、学生の反応などを含めた授業の様子に触れ、肯定的に評価するとともに自分自身の授業を省察するコメントが多く見られた。

また、**Ⅲ－1の図1**で見たように「アドバイス」を「お願い」される立場ながら、「難しい」が＜担当者コメント／前＞と同様に＜参観者コメント＞にも共起しており、授業担当者の苦労に共感を示しつつすぐ役に立つ助言ができないもどかしさもうかがえた。KWICコンコーダンスで検索した結果の一部を以下に示しておく。

「難しい」(36)

・学生が主体的に演習授業に取り組む仕掛けをするのは私も難しいと考えています。

・私の授業でもレベルを統一して指導することの難しさを感じています。授業に取り組む姿勢にも大きな差があり、意欲的でない学生は学力的にも低さを感じます。
・講義形式の授業では学生の理解がどこまで得られたのかを掴むのは難しいと思います。学生のレベルをどのようにして把握すればよいのか悩むところです。古典的な方法としては、小テスト等を毎時間行うこと等がありますが、準備と採点に手間がかかるのが難点です。

Ⅲ－2－3　＜担当者コメント／後＞の記述内容

＜担当者コメント／後＞の共起ネットワークを以下図4に示す。

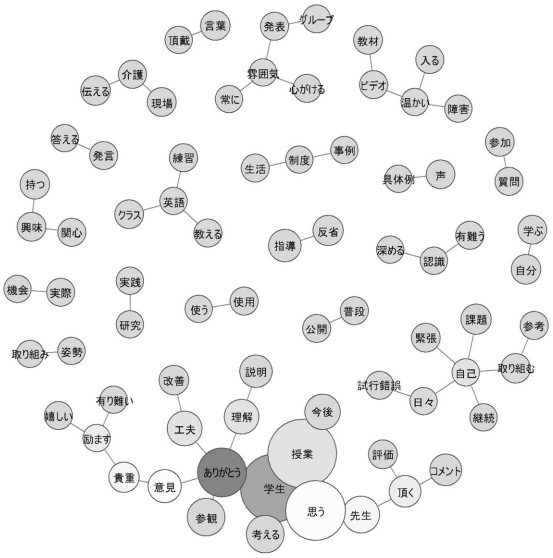

図4　＜担当者コメント／後＞の共起ネットワーク

授業担当者は、参観者からのコメントをどのように受けとめたのだろうか。**図4**には中央下部のやや大きめの円で示された「ありがとう」の他に「有り難い」「有難う」が見られ、参観者からのコメントに感謝を述べたことが分かる。何に対しての感謝であるのか、「意見」「指摘」「反省」「改善」に加えて「必要」「課題」をKWICコンコーダンスで検索した結果の一部を示し、以下に見ていく。

「意見」(48)

・先生から「学園保育コースからのをリーダーとしての集団作り」というご意見に勇気を得ました。
・自主的な活動になるようなシステム、授業の流れを重要視しておりますので、ご意見を嬉しく拝読致しました。
・受講生が増すほど、理解してもらうことに苦慮いたしますが、ご意見を参考に、レベルに合わせた課題を検討したいと思います。

「指摘」(34)

・ご指摘頂いた授業のペースの件ですが、どうしても通り一遍であればなかなかイメージが描き難いと思い、具体例を交えながらの展開を心掛けています。難点としてはゆっくり過ぎるため、計画通りに消化できない点があります。
・確かに授業の前半部分を絵本とDVDに割きましたが、少し長かったのではというご指摘について真摯に受けと

め、改められるところは改めていきたいと思います。私自身、短大の教育に携わる一員として、教育とはそもそも何なのかについて、今後とも認識を深めるとともに、研鑽していきたいと考えます。

「反省」(27)

・90 分を通して導入、展開、まとめとありますがまとめの部分が不十分であったことを深く反省しています。

・この授業では、雰囲気づくりを大切にしているため、進行上、否定的な言葉かけや指導を控えていますが、今回は進行がうまくいかずに私語が目立ったことは反省点です。

「改善」(25)

・言葉がけだけでは改善されないように感じていますので、さらなる工夫を試みたいと思います。

・学生一人一人のモチベーションを上げることと、座席の配慮も必要だと感じました。今後努力改善していきたいと思います。

「必要」(38)

・全員が真剣に取り組めるような工夫と、一人一人の理解に応じた丁寧な対応が必要だと感じています。

・学生の議論を促すには入念な準備が何より必要とあらためて痛感しました。

・日常生活にひきよせて自らの体験や考えを引き出すような投げかけが必要と思っていますが、なかなかジャストな質問ができません。

「課題」(30)

・授業の構成や進め方の工夫は、試行錯誤の連続ですが、私語対策も含めて、自己の課題として今後共に継続的に取り組んでいきたいと思います。

・学生の興味関心を引くような授業を心がけていますが、まだまだ課題も多いです。常に総論ばかりの話にならないよう、具体例や経験談を一緒に伝えるようにしています。

・平易な表現で授業内容を理解していくことのむずかしさを感じているのは先生方共通の課題であると認識しました。

以上のように、授業担当者は改善が必要な点を具体的に認識し、自身の課題に前向きに取り組んでいこうとする姿勢が見られた。これはたいていの参観者が共感的で肯定的なコメントを述べていたことと無関係ではないだろう。

しかしながら、例えば「全員が真剣に取り組めるような工夫」が必要であると認識していてもどのような「工夫」を編み出したのかまでは記述されておらず、他にも「学生のモチベーション」の上げ方や「授業内容の理解」を促す方法についてなど、改善をもたらす具体的な方法や工夫、戦略等を、授業担当者が公開授業を通して見出せたとは言い難いのではなかろうか。**Ⅲ－1の図1**からも、担当者から参観者へ、また参観者からも担当者へ感謝の言葉が互いに交わされているが、「難しい」「課題」は両者に残されたままであることが推察された。

Ⅲ－3　結果まとめ

本論の目的は、本学の四年半にわたる「教員相互による公開授業参観」の成果と課題を明らかにすることであった。授業担当者および参観者による報告書のテキストマイニングを用いた分析から、その成果と課題について以下の通りまとめることができよう。

本学の「教員相互による公開授業参観」はその名の通り、授業を公開した教員も参観に赴いた教員も自身の授業改善を目的として参加する相互研修型の FD といえる。相互研修型 FD を推し進めてきた京都大学高等教育研究開発推進センターによる「相互研修型 FD の総括」をテーマにしたシンポジウムにおいて、山田（2012）は「教員が集い、対話や協働を基に自らの実践を省察し、力を得て日常に帰っていく。そのための『場』をいかにつくりだしていくか」ということが、相互研修でやらなければならないことであると述べている。

今回分析の対象とした報告書には、まさに授業担当者・参観者間の対話があり、授業改善に向けての協働が見られた。授業担当者にとっては、日々の授業に苦慮しているのは自分ひとりではないことが分かり、自分なりの工夫や努力を肯定的に評価されることで力を得て、前向きに授業実践に取り組んでいく姿勢につながったのは成果のひとつに違いない。参観者にとっても、他者の授業から学ぶべき点を見出し自身の授業について改めて内省できたことが成果といえよう。

しかしながら、今後問われるのは、授業を公開し参観したことで実際に授業が改善したという実証であろう。現状は、報告書分析で見てきたように、改善が必要なことは分かっても授業改善のための具体的方法や戦略等を得るには至っていない。今後の課題の一つである。FD を組織レベルで捉えたとき、それは教員個々人の努力のみに頼むべきものではなく、教員集団で課題を広く共有し、研修会や情報交換等を通じてより良い教授法の浸透を

図ることも考えるべきであろう。

さらには参観終了後、授業がどのように変化したのかをフォローアップする仕組みがないため、どの程度改善がなされたのかは不明確なままである。これが二つ目の課題である。上述の山田と同じシンポジウムで、高橋（2012）は「目標を設定し、その目標に対する達成度の部分が見えてこないと、だんだんしんどくなる」と述べ、相互研修型FDの継続には工学的経営学的モデル（PDCA）の視点も必要であると示唆している。冒頭で述べたように次第にルーティーン化してきた本学の取り組みにとって、高橋の指摘は検討に値すると思われる。

Ⅳ　今後の議論に向けて

上記二点の課題に関して論点となる事項を以下に挙げ、本論の結語とする。

①授業の改善とは何か — 目標の明確化

授業改善のための具体的方法や戦略等をどのようにして得ていくかが、一つ目の課題であった。しかし、そもそも目標とすべき授業とはどのような授業なのかについては議論の分かれるところであり、授業は複雑で多様な要因から成り立っているため、共通認識が持ちにくいという問題がある。専門専攻の特性による違いもあるだろう。

一例として、学生にとっての良い授業、教員にとっての良い授業は異なるという研究報告（山内他、2014）がある。また、本論でも見られたように学生の授業内容の理解に関し苦慮する教員は少なくないが、授業内容の理解度が高まることによって授業の満足度（学生にとっての良い授業）が高まるとは必ずしもいえないとの指摘（星野他、2005）もある。

目標が定まらなければ、授業改善のための具体的な方法や戦略を立てようがない。学生が多様化し、社会が大学に求めるニーズも変化する中で議論はさらに拡散しがちであるが、ディプロマポリシーや学科コースの教育目標・カリキュラムポリシー等まで立ち返っての検討も必要となるかもしれない。

② FDの実質化へ—評価システムの構築

二つ目の課題は、授業を公開し、参観したことで自身の授業がどのように変化したのかをフォローアップする仕組みがないことであった。PDCAモデルで言い換えれば、目標達成度を評価するシステムの不在である。「誰が・何を・どのように評価するのか」がシステムの要であるが、教員集団の協働を促すとともに持続可能なシステムであることが求められよう。

小原ら（2013: 既出）は高等教育機関における授業にも初等中等教育における「授業研究」の手法を取り入れることを提案している。また、村上ら（2014）は授業研究を行う上で労力のかかるさまざまな情報の共有や分析を、ICTを活用したシステムの開発により支援できる可能性について言及している。これらの先行実践事例も参考にしながら、本学のニーズに応じた評価システム構築に向けての議論が望まれる。教育の主体であるべき学生による授業評価も重要な資料となろう。

（引用文献）

・張揚・下田誠・三石初雄（2015）．教員養成系大学・学部におけるFDの実施組織と取組みの実態に関する研究 — 国立大学を対象としたアンケート調査結果に基づいて —　東京学芸大学紀要　総合教育科学系(監), 66，563–584.

・樋口耕一（2014）．社会調査のための計量テキスト分析 — 内容分析の継承と発展を目指して　ナカニシヤ出版　KH Coder Index Page（http://khc.sourceforge.net）

・星野敦子・牟田博光（2005）．大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係　日本教育工学会論文誌，29(4)，463–473

・石田基広・小林雄一郎（2013）．Rで学ぶ日本語テキストマイニング　ひつじ書房

・石村雅雄（2002）．講演録「教員が互いに授業を参観する意味と問題点」　大阪府立看護大学医療技術短期大学紀要，8，79–84

・北村瑞穂・鍛治谷静・奥田純（2013）．ポスター発表「四條畷学園短期大学におけるFD活動」　関西FD連絡協議会第6回総会　FD活動報告会2013(於:京都大学)

・村上正行・山田政寛（2012）．大学教育・FDに関する研究における教育工学の役割　日本教育工学会論文誌，36(3)，181–192

・小原豊・前田裕介（2013）．高等教育機関における相互授業参観に関する小考　関東学院大学人間環境研究所所報，11，3–10

・高橋哲史（2012）．報告2「『相互研修型FDの総括』へのコメント　関西地区FD連絡協議会の活動を中心に」　第18回大学教育研究フォーラム『相互研修型FDの総括』　京都大学高等教育研究開発推進センター　京都大学高等教育研究，18，146–152

・山田剛史（2012）．報告1「『相互研修型FD』のインパクト — 三つの大学教育センターにおけるFD実践の省

察から―」 第18回大学教育研究フォーラム『相互研修型FDの総括』 京都大学高等教育研究開発推進センター　京都大学高等教育研究，18，138–145
・山内尚子・耳野健二・佐藤賢一（2014）．京都産業大学における授業アンケートの成果と課題　高等教育フォーラム，4，105–109

－2016. 3. 31 受稿 、2016. 3 . 31 受理－

資料１

公開授業に関わる報告書（２０１０年度後期）

公　開　授　業　科　目	開講学科	履修登録学生数		実　施　日
	（　　）保　育 （　　）ライフ （　　）介　護	１　年 人	２年以上 人	年　　月　　日 曜　　限
（　　）清　風　学　舎 （　　）北　条　学　舎　　教室		（　　）必　修 （　　）選　択		（　　）講義（　　）演習 （　　）実習
授　業　担　当　者		授　業　参　観　者		

①　授業担当者

★　授業に関してのご方針、現在授業に関してお困りのこと・改善したいと思われていること等

記入日　　年　　月　　日

②　授業参観者

★　①に対するご意見・ご助言等

★　授業を参観し、ご自身の授業にも取り入れたいと思われた教授方法および授業実施上の工夫（視聴覚教材の使い方・私語対策・学生の質問への対応等）がございましたらご記入下さい。

提出日　　年　　月　　日

③　授業担当者

★　授業を公開しての感想および授業参観者のコメント（②）に対してのご意見等

提出日　　年　　月　　日